

岸俊男会長の思い出

平 野 邦 雄

本会の会長であり、奈良県立橿原考古学研究所長、愛知学院大学教授、京都大学名誉教授岸俊男氏が、去る一月二十一日、閉塞性黄疸のため逝去された。享年六十六才。まことに悲しい限りである。本学会における偉大な業績をしのび、哀悼の意をこめて、ここに一文を草することとした。

岸さん——生前のようにこう呼ばせて頂きたい——の経歴と著書・論文は、岸俊男教授退官記念会『日本政治社会史研究』上・中・下(昭59・60)の巻頭と巻末に詳しく記されているので、それに委ねることとし、ここでは岸さんの学風と業績を私なりにまとめ、あわせて本簡学会との関係を記し留めおくこととした。

岸さんのお名前を私が知ったのは、昭和二十五、六年、つまり岸さんが京都大学助手から奈良女子大学講師に移られたところで、「古代村落と郷里制」(『古代社会と宗教』昭26)、「古代後期の社会機構」(『新日本史講座』昭27)などの村落制度、郷里制についての論文、もう一つは「越前国東大寺領庄園の経営」(『史林』三五―二、昭27)にはじまる東大寺領の経営をめぐる政治史の論文に接したときである。前者は戸籍・計帳、後者は東大寺関係文書、いうならば正倉院文書

の分析を基礎とする論文で、史料から正確に史実を抽出してゆく技法の見事に敬服した記憶がある。ことに戦後の粗末な紙に印刷されたこれらの論著はなつかしく、今もすべて私の書架にある。

岸さんの訾咳に悠り接したのは、昭和三十三年から三ヶ年、竹内理三教授を代表者とする研究グループで、正倉院の戸籍・計帳の原本調査を行ったときである。真白い上張りを着て、端然とした姿勢で文書のスケール、界線、継目、国印などを一々計測し、裏文書を照合し、一字ずつ文字を点検してゆくその姿は、まさに顕微鏡で対象物を観察し、試験管に試薬をそそいで反応をたしかめる科学者のそれを連想させた。物に即した精緻な学風は、まさにこれと通ずるのであろう。その後、戸籍・計帳の研究は、造籍年次、計帳手実、古代人名、さらに班田などの個別研究に進み、『日本古代籍帳の研究』(昭48)にまとめられ、東大寺領の研究は、造東大寺司、藤原仲麻呂、さらに光明立后や元明天皇の崩御をめぐる政局へと進み、これにワニ氏や紀氏などの政治的氏族の研究が加わって、『日本古代政治史研究』(昭41)にまとめられたことは周知のとおりである。昭和三十八年ごろ、ことに四十年代から岸さんの研究の主対象は

181